



第2図 豊島で発見した新たな石丁場跡 (S=1/50,000)

丁場の大まかな分布範囲を明らかにした。海岸部から海中に向かって石積があり、船への石材積載用に築かれたものと想定される。「われいし」の矢穴は10cmを越える大きさで、比較的古い時期の矢穴と推定できる。また、海岸踏査により、近世～近代の矢穴石や近代の製品を確認した。この海岸の奥地の谷筋には、小さい矢穴が見られるコッパ石がある。この山間部に石丁場が存在したといえよう。文献に記された甲生と比定できる。

一方、家浦丁場の所在地は明らかでなかったが、地元住民への聞き取りにより近代石丁場が甲崎地区にあったことが明らかになり、その周辺を空中ドローンにより撮影した。その結果、海岸部に近世初頭と考えられる矢穴石を確認した。文献に見る家浦は甲崎地区と比定できる可能性が高い。また、この二カ所以外にも空中ドローンにより小学校裏手の山間部に矢穴が確認されたが、近代の石丁場の可能性が高い。豊島での調査は今後の課題としたい。

(橋詰)

III. 小瀬原石丁場における水中調査

小瀬原石丁場の海岸部では、2014～2018年の調査（徳島文理大学編 2019）によって、石材密集地点が3カ所確認されている。それぞれA・B・C地点に区分しており、そのうちA地点の大型石材には矢穴を確認している。石材上部にある矢穴列は、幅10～12cm、厚さ4cm、深さ10cm前後である。

小瀬原石丁場の海岸部を調査することで、山間部の石丁場の場所を推定できることから、海



写真3 潜水と水中ドローンによる調査



写真4 水中ドローン

岸部を本格的に調査することになった。まずは海岸部の様子を把握するため、小瀬原石丁場で事前調査として水中調査を実施した。水中ドローン・空中ドローン・人間による潜水によって調査した（写真3）。水中ドローンはCHASING M2を使用し、操作と結果解析は三好真千（徳島文理大学）が率いるチームが実施した（写真4）。当日の海中の透明度が悪く、潜水による調査では、視距離が約50cmしかないうえ、水温が低いため、水中活動時間の点で、調査自体が困難であった。一方、水中ドローンであれば、水温に左右されずバッテリーの範囲内で長時間の調査が可能である。この水中ドローンによって、A地点の大型石材の海中部分に新たな矢穴列を発見することができた（写真5）。水中ドローンの有用性の可能性を示すものといえる。しかしながら、目視による探索であるため、透明度が悪い場合、有効性に課題がある。今後の課題として透明度に関係なく水中の石材を探しだす方法の検討が必要である。



写真5 新発見の水中の矢穴

（高田）

IV. 小瀬原石丁場の分布調査

第3図は、現在小瀬原石丁場近辺でみつかっている全ての矢穴石・刻印石の分布を示したもので、全部で16点ある。

山間部における分布調査は、主に谷を歩いてハンディGPSで記録しながら矢穴石を発見することである。年度当初から所在が判明していたNo.7のすぐ東で近代頃と思われる石引道を確認したため、No.7が分布する谷を登るように分布調査を開始した。谷を登っていくと、巨大な割石が多数分布しており、小さい矢穴痕やルートハンマー痕もみられた。ただし、幅6～7cm、深さ10cm程度の矢穴が頂上や転石にもみられることから、近世から継続して採石されていた可能性が高い。この谷筋では、割石中に刻印石（No.6）を発見することができた。

その後、西の谷筋（No.4が分布する谷）に移動すると、頂上付近で戦後以降の採石場を確認した。この採石場では山頂部を重機で削って採石するという方法で行われており、山頂部か